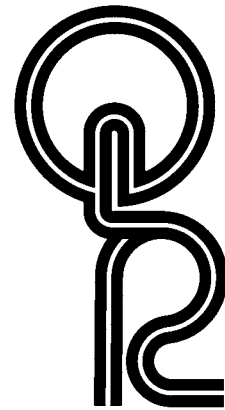


QR Newsletter



第四紀通信

Vol. 21 No.6, 2014



「5th International Meeting on Paleoseismology, Active Tectonics and Archeoseismology」のプレ巡検で訪れた韓国の東海岸に位置する小規模な断層（Suryum 断層）の断層露頭。
(撮影：吾妻 崇)

Vol. 21 No. 6

December 1, 2014

学会賞・学術賞受賞者選考報告 2	INQUA 名古屋大会登録締切りについて 12
論文賞・奨励賞受賞者選考報告 6	2014 年度第 2 回評議員会案内 12
学会賞・学術賞受賞者講演会のお知らせ 8	国際会議参加報告 13
2015 年学会賞・学術賞候補者推薦募集 9	国際会議の案内 14
2015 年論文賞・奨励賞候補論文推薦募集 10	学術会議の報告 15
2014 年大会若手発表賞の報告 11	2014 年度第 3 回幹事会議事録 16
2015 年大会（第 1 報） 12	2013 年度第 6 回幹事会議事録 18
	追悼 19
	会員消息 20

◆学会賞・学術賞受賞者選考報告（学会賞受賞者選考委員会委員長：中村俊夫）

(1) 選考経過

本年度の学会賞等の候補者の推薦・立候補は1月31日をもって締め切られ、それまでに学会賞に2名と1グループ（3名から構成）、学術賞に4名の候補者が推薦され、学会賞受賞者選考委員会（中村俊夫委員長、海津正倫、河村善也、杉山雄一、高原 光各委員）にて検討された。選考委員会では推薦のあった候補者について日本第四紀学会学会賞規定、同内規に基づき、推薦文書、各委員が収集し持ち寄った業績目録および幹事会から提供のあった学会活動等に関する資料を参照して審議を行った。なお、選考にあたり、学会賞は第四紀学会正会員としての「学術的な業績」・「第四紀学に貢献した活動」・「学会に貢献した活動」を選考基準とし、学術賞は第四紀学会正会員としての「学術的な業績」を選考基準とした。また、選考委員が授賞候補者となっている事項については、当該選考委員を外した4名の選考委員にて選考を行い、既に学術賞を受賞している学会賞受賞候補者については、学術賞受賞後の「学術的な業績」も選考基準に加えた。電子メール上での意見交換および5月17日の選考委員会での審議により受賞候補者を決定した。その後、6月7日に行われた評議員会において審議され、下記の通り受賞者が決定された。

(2) 受賞者

●学会賞

受賞者名：小野有五

受賞件名：「東アジアにおける氷期・間氷期の気候変化と地形発達の研究と環境保全に関する実践的研究」

受賞理由：小野有五会員は、従来、二つの異なる氷期に対比されてきた北海道日高山脈の氷河地形について地形と堆積物の詳細な研究を行い、これらが最終氷期における2回の亜氷期に対比できることを示した。この研究成果は、その後の氷河地形の研究に大きな影響を与えてきた。また、氷河地形の研究を発展させて、さらに対象地域を拡大し、最終氷期の古環境復元に欠かせない東アジアにおける雪線高度、風成塵の給源と堆積域を明らかにし、最終氷期におけるモンスーン変動をダイナミックに捉えることに成功した。この一連の研究は、現在につながるモンスーン変動の研究を先導した研究と言え、東アジアという広域において気候と地形の変動を時空間的に捉えた第四紀学的かつ画期的な研究である。これらに加えて小野会員は、M.H. フレンチの「周氷河環境」を翻訳し、この分野の研究推進に尽力してきた。近年は、地形学や第四紀学を基礎として、自然環境変化に対する人間活動の影響の研究や、地域と連携して環境保全などにも取り組み、また、第四紀学などに関する普及書を多数出版するなど、一般市民への情報発信にも貢献してきた。日本第四紀学会においては、評議員を9期務めるなど、第四紀学の研究や学会の発展に貢献している。更に地球圏・生物圏国際協同研究計画（IGBP）におけるコアプロジェクトである地球古環境の研究（PAGES）において1995年から2000年の6年間にわたり執行委員会委員及び日本代表となり、特に地球を南北に3つのトランセクトに分けて古環境変動を解明する Pole-Equator-Pole（PEP）計画のアジア-オーストラリアにおける研究を推進した。これらの成果は、1997年と2004年に Quaternary International から特集号として出版されている。

以上のように、日本とアジアの第四紀学と本会の発展に多大な貢献をなしてきた小野会員の功績は、日本第四紀学会学会賞にふさわしいと判断する。

＜受賞者の言葉＞ 小野有五



このたび、日本第四紀学会の最高の賞である学会賞をいただきましたが、純粋な研究だけでなく、環境保全に関する実践的な研究をも評価していただきましたことを、大変、嬉しく思っております。

1972年、札幌での日本第四紀学会で、当時、日本の第四紀学の権威であられた湊 正雄さんの日高山脈での氷河編年を否定する発表をいたしまして、かけだしの若造が何を言うかと御叱りを受けたのが、第四紀学会との関わりの初めてでした。もう一人の権威であられた小林国夫さんは、すでに周囲からの理不尽な攻撃による心労から病床にあり、私の不躰な質問にもお手紙で丁寧に答えてくださいましたが、小林さんが出された日本アルプスの約4,000mという雪線高度には賛同できず、30年かかって、2003年に現在の雪線高度約3,000mという論文を書くことができました。

小さな山岳氷河しかなかったところで氷河地形の研究をして何になるのだと批判もされ続けましたが、逆に氷床から離れた日本のような場所の氷河こそ、アジア・モンスーンなどの気候変動に敏感に反応するのではないかと考え、がんばってきました。1990年代後半からIGBPのPAGESに参加するようになると、地球を3つの南北トランセクトに分けて北半球と南半球の気候変動の同時性やズレを明らかにするPEP計画のなかで、日本やヒマラヤ、NZの山岳氷河変動と、海水温変動、レス

変動をプロクシーにもつ PEP II トランセクトの重要性をアピールしました。

しかし、1987年、北大の地球環境科学研究科に赴任し、北海道の河川問題に関わり始めていた私は、1991年から本格的に千歳川放水路問題に取り組むことになりました。環境科学を標榜する大学院の教授でありながら、河川をめぐる当時最大の公共事業で自然がむだに破壊されようとしているのを看過できないと考えたからです。チベット高原でのレス・古土壌の発達と氷河変動との関連という、もっとも熱中した研究や、北極圏での周氷河研究がまさに始まったところで、このような環境問題に多くの時間を取られることは身を切るほどにつらいことでしたが、目の前で起きている環境問題に、自然のことをいちばんわかっている第四紀学・地理学の専門家が関わってこなかったことが、日本の環境をこれほど悪くしてしまったのだ、という思いがありました。研究に忙しいから、自分は河川の専門家ではないからと、自らが見て見ぬふりをしてしまえば、世界は何も変わらないのです。

けっきょく10年かかって、千歳川放水路計画は市民の力で中止させることができました。わかったことは、日本の環境に決定的な力をもっているのは、河川工学や土木工学といった工学者たちだということです。彼らが仕切っているアリーナに割り込んでいき、第四紀学や地理学の研究者を新たなアクターとして認めさせ、私たちの論理で彼らの誤りを指摘することは、圧倒的な力をもった彼らを相手に、まさに「たたかう」ことでした。

3.11をきっかけに原発の問題と直面することになりましたが、河川工学が原子力工学に変わっただけで、ここでもまったく同じ状況が続いています。そのなかで、長年、地道に活断層の研究を行ってきた第四紀学の研究者たちが初めて正当に評価され、重要なアクターとしてアリーナに登場できたことは、ほんとうに喜ぶべきことでした。意見が違うからといって同じ第四紀学の仲間を誹謗中傷するのではなく、いまこそ日本第四紀学会は、学会の責任において、日本の原発立地問題を論議する中立的で開かれた場をつくるべきだと思います。実践的研究が初めて学会賞として評価されたことを機に、学会も社会への貢献をめざして大きな一歩を踏み出していきたいと願っております。

●学会賞

受賞者名：齋藤文紀

受賞件名：「日本列島及びアジアの大陸棚から沿岸平野の地質と後期第四紀の古環境に関する一連の研究」

受賞理由：齋藤文紀会員は、大陸棚から沿岸域に発達する第四紀最終氷期最盛期以降の地層に対して、堆積学的な手法を使い、その形成機構や古環境を海水準変動との観点から明らかにしてきた。堆積システムから地層を捉えたこれらの研究は、わが国の沖積層研究に基礎を築くとともに、この分野に新しい展開を導いた。さらにこれを南アジアから東南アジアに至る大陸棚から沿岸平野の研究に発展させ、黄河、長江、紅河、メコン川、チャオプラヤ川、ゴダバリ川などのデルタや、東シナ海、スンダ陸棚で調査・研究を行ってきた。そして、高分解能の模式層序を提示し、海水準変動、古環境、沿岸堆積に関して110編以上の論文を国際学術誌に発表してきた。これらの多様なデルタに対して、数千年オーダーから季節変化まで様々な時間スケールで、堆積作用や地層形成過程を明らかにし、世界のデルタ研究を大きく進展させた。さらにこれらを、近年の人間活動の影響も考慮したデルタの環境保全に関する研究にも応用してきた。研究遂行にあたっては、当該国との共同研究として推進するとともに、内外の研究者を束ねて研究者の育成に多大な貢献をして、各国における研究の高度化を推進した。齋藤会員は、日本第四紀学会の評議員を8期にわたり務め、副会長・幹事長・幹事などを歴任し、学会関連の出版物、第四紀学会の50周年記念行事では国際シンポジウムを成功させるなど、学会の発展にも大きな寄与があった。またIGCPプロジェクト475「モンスーンアジア太平洋地域のデルタ」の共同代表を務め、INQUA ケアンズ大会とベルン大会の日本代表、第19回INQUA日本招致準備委員会の委員長を歴任し、2015年の名古屋大会招致に成功し、現在、国際第四紀学連合第19回大会組織委員会の委員長として多大な尽力をしている。

以上のように、日本とアジアの第四紀学と本会の発展に多大な貢献をなしてきた齋藤会員の功績は、日本第四紀学会学会賞にふさわしいと判断する。

<受賞者の言葉> 齋藤文紀



この度は、日本第四紀学会賞という荣誉ある賞を頂き、大変光栄に存じます。ありがとうございました。私が第四紀学とかかわりを持つようになったのは、大学四年の時に、亀井節夫先生と石田志朗先生の指導の下で、大阪層群下部相当層の三豊層を卒論のテーマにしたことに始まります。大学では第四紀ゼミに入り先輩の竹村さんに火山灰層序を学び、卒論では、松田さん、三宮さん、同級の山崎さんに助けて頂き提出することができました。地質調査所に就職後は海洋地質部に属し、現在の堆積物を扱うようになりました。20代から30代の前半に、大嶋さん、松本さん、井内さん、横田さんらと、日本の様々な沿

岸域の調査に参加できたことは、本当に幸いでした。同じく 20 代の頃に、杉村さんと米倉さんが主導していた「中部太平洋における海面変動とテクトニクス (HIPAC)」プロジェクトにメンバーとして参加する機会を得て、地球規模の視点で、また学際的で幅広い視野を持ったチームで研究することの重要性を学べたことは、その後のアジアの沿岸域の研究を展開する基礎になったように思います。

アジアにおける研究展開は、そのほとんどが人的なネットワークによるものであったように思います。海外調査では、誰をカウンターパートにするかが成否を分けるほどに重要です。20 代の頃に東シナ海に航海でお世話になったウッズホール海洋研究所のミリマンさんの紹介で、中国との共同研究が始まる時に青島海洋大学（現在の中国海洋大学）の楊 作升さんを紹介して頂き、楊さんからは長江の調査に汪品先さんを紹介して頂きました。その後も、これらの方々を通じて、多くの共同研究者と知り合う機会を得ました。現在ではカウンターパートの中心も次の世代以降になっていますが、継続して共同研究ができること、後継者が育っていることは嬉しい限りです。他の国々のベトナム、カンボジア、タイ、インドなどの調査でも同様です。国内外の多くの方々を支えられてここまで研究を続けていくことができました。また、これまでの研究の多くは、一緒に研究をしてきた人達の協力があってこそです。

このような立派な学会賞を頂けるのも、これら多くの方々を支えられてきたことによるものです。お世話になった方々をここですべて申し上げられませんが、若いときから現在まで、ご指導頂いた多くの方々や共同研究者の方々、また推薦して頂いた方々に、改めて心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

●学術賞

受賞者名：阿部彩子

受賞件名：「氷期・間氷期サイクルと古気候モデリングに関する一連の研究」

受賞理由：阿部彩子会員は、最近 100 万年間の気候変動の最大の謎である「氷期・間氷期サイクルがなぜ」の「のこぎり型」で 10 万年周期なのか」という問題に取り組み、数値シミュレーションを用いて、これらの現象の特徴を再現することに世界で初めて成功した。北半球高緯度の夏の日射量変動と氷期-間氷期サイクルの密接な関係はミランコビッチ仮説として広く知られており、さまざまな古気候データが蓄積されている。これまで、欧米の研究グループを中心に大気海洋結合大循環モデル (AOGCM) を使って 10 万年周期の卓越を説明する研究が進められてきた。しかし、約 2 万年と 4 万年の変動周期が卓越する日射量変動と、最近 100 万年間に卓越する 10 万年周期および「のこぎり型」を示す変動との関係については合理的な説明が得られていなかった。阿部会員は、初めて、AOGCM と固体地球の変形モデルおよび氷床の三次元物理モデルを組み合わせた時空間変動復元を試み、「のこぎり型」で 10 万年周期の変動のメカニズムが大気-氷床-地殻間の非線形な相互作用に基づくものであることを明快に説明した。さらに、大気中の二酸化炭素濃度の変化はサイクルの振幅を増幅させる機能はあるものの氷期・間氷期サイクルの主要因ではないことを検証した。この研究により、第四紀中・後期の氷期・間氷期の環境変動に関する理解が大きく進展した。また阿部会員は、AOGCM を用いて過去の気候変動についての研究を国際的に推進しており、国連の「気候変動に関する政府間パネル (IPCC)」の第 5 次評価報告書のまとめにおいて古気候に関する章の代表執筆者に選ばれている。

以上のように、阿部会員の氷期・間氷期サイクルと古気候モデリングに関する一連の研究は、日本第四紀学会学術賞にふさわしいと判断する。

<受賞者の言葉> 阿部彩子 阿部会員の<受賞者の言葉>は、本誌次号に掲載いたします。(幹事会)

●学術賞

受賞者名：池原 研

受賞件名：「日本周辺海域における最終氷期から現在に至る海洋環境変動と堆積作用に関する一連の研究」

受賞理由：池原 研会員は、三十余年にわたり日本周辺海域における表層堆積物の採取・分析と解析から、最終氷期から現在に至る海洋環境変動と堆積作用の研究を行ってきた。これらの研究は、日本周辺海域における表層堆積物の分布調査、海域におけるイベント堆積物の堆積機構と再発頻度の解明、日本周辺海域における最終氷期から現在に至る海洋環境変動の解明の、大きく 3 つの分野に分けることができ、それぞれの分野で優れた業績をあげている。日本周辺海域における表層堆積物の分布は、池原会員の多大な研究成果にもとつき数多くの 20 万分の 1 表層堆積図として出版されている。これらは海洋に関する最も基礎的なデータであるとともに、海流や海洋構造などの海洋環境の変化と海底堆積物との相互作用の解明にも大きく貢献している。海底から採取した柱状試料の解析では、地震や津波などのイベント堆積物の研究から、各海域におけるタービダイトの再発頻度を明らかにし、海域における地震履歴の解析に大きく寄与してきた。特に、2011 年の東北地方太平洋沖地震と津波に起因するタービダイトを仙台中で見いだした

ことは、今後の海域における津波堆積物の研究へつながる重要な業績と言える。同じく日本周辺から採取した柱状試料の解析に基づく最終氷期以降における海水の時空間分布と海洋構造の変遷の解明や、テフラを鍵層とした放射性炭素年代測定において問題となる海洋リザーバー年代の海域による違いの解明等の基礎的な研究は、日本周辺の古海洋の総合的な理解に貢献するものであり、高く評価される。これら一連の研究成果は国際学術誌に数多く発表されており、日本の第四紀研究の成果を広く世界へ発信するという点でも高く評価できる。

以上のように、日本周辺海域における海洋環境変動と堆積作用の研究に多大な貢献をなしてきた池原会員の功績は、日本第四紀学会学術賞にふさわしいと判断する。

＜受賞者の言葉＞ 池原 研



このたびは名誉ある日本第四紀学会学術賞をいただき、大変光栄に存じます。誠にありがとうございました。私の受賞件名である「日本周辺海域における最終氷期から現在に至る海洋環境変動と堆積作用に関する一連の研究」は、私が地質調査所で行ってきた海底堆積物についての仕事に対してのものと理解しています。振り返れば、1982年に地質調査所に入所以来、様々な調査研究に従事させていただきました。地質調査所の海洋地質図の作成という業務に軸足において、西南日本周辺の表層堆積物と海洋環境との関係、陸棚上のベッドフォームから始まり、日本海の海底斜面崩壊、日本海を始めとした後期第四紀の海洋古環境変遷やアジアモンスーン変動、海底の地震性堆積物を用いた地震発生履歴、海底堆積物中の火山灰の年代決定による海洋リザーバー

の時空間復元など実に多様なことをやってきた（今もやっている）と思います。これらの唯一の共通点は、海底堆積物を扱う、という点です。

海洋の調査研究は一人ではできません。上記の研究項目を行うにあたっては多数のプロジェクトの中で、様々な専門の方との協働して行ってきました。同じ海、さらに言えば同じ堆積物を扱っていても、専門が異なると、視点や考え方、試料の扱い方、分析結果の見方などに違いも多々ありました。そういう中での調査研究は「第四紀研究」に必要な学際的な視点を育ててくれたと思います。また、第四紀学会や関係する委員会などを通じて見聞きした知識も私の研究を進めてくれたと思っています。一見関係ない違う仕事の研究結果が、あるとき関連しあって、考えを進められるということも最近をよくあります。いろいろな方々に教えてもらいながら、協働してきたことを今はよかったですと心から思っています。

海底堆積物の仕事も、やればやるほど、新しいことがわかり、また新しいわからないことが出てきます。ですが、堆積物屋として大事なことは「ものをしっかり見て、その特徴をしっかりと記述すること」だと思っています。その上で、目的に応じた分析を行い、しっかりとした議論をしていくこと。この当たり前のことをもう少し突き詰めていければと思っています。これまでお世話になった多くの方々に感謝し、また、今後とも協働させていただくことをお願いして、受賞のお礼とさせていただきます。このたびは本当にありがとうございました。

●学術賞

受賞者名：高原 光

受賞件名：「花粉分析に基づく後期更新世以降の東アジア植生史研究への貢献」

受賞理由：高原 光会員は、西南日本の最終氷期以降のスギの分布変遷を中心として、山間盆地のボーリングコア資料の花粉分析による植生復元に基づく植生史研究を展開してきた。緻密なデータにもとづいて、植物生態学的観点から植物群の時間的・空間的分布変遷を明らかにし、Dansgaard-Oeschger (D-O) イベントなどの短期間の気候変化や人為あるいは火事による森林への影響を解明し、数多くの論文を公表してきた。花粉資料を環境復元の手段として用いるのではなく、花粉資料を用いて第四紀の環境変化が生物群に与えた影響を解明するという生物学的観点からの研究を、学際的に推し進めてきた。特に、バイカル湖周辺やサハリンなどを対象とした植生史研究をロシアの研究者と合同で早くから開始し、大陸域の植生史や現生植生の調査にもとづき、最終氷期以降の日本の植生変遷をとらえ直した功績は大きい。バイオーム（植物群系）にもとづいた古植生復元や、サハリン、台湾、日本の花粉ダイアグラムの比較にもとづくD-O イベントに伴う森林組成の変動の解明などの成果は、東アジアの植生史研究をグローバルな比較研究へと前進させた画期的な研究といえる。これらの研究の過程で、多くの若手研究者を育て、若手研究者との共著論文を国際誌に多数発表してきた。国際花粉学会・古植物学会 2012 年東京大会では事務局長として奔走し、東日本大震災後の困難な状況にもかかわらず多くの参加者を得てこの国際会議を大成功に導いた。また、国際花粉学連合の副会長をはじめ国内外の諸学会においても要職を務めている。これらの活動は日本の第四紀学の国内外への発信に大きな貢献をしている。

以上のような高原会員の一連の研究と活動は、日本やアジアの第四紀後期の植生変遷史の復元に大きく貢献していることから、日本第四紀学会学術賞にふさわしいと判断する。

<受賞者の言葉> 高原 光

このたび、たいへん名誉ある日本第四紀学会学術賞を賜り、皆様から心からお礼申し上げます。これまで、40年近く、主に花粉分析による古生態の研究を続けてきたことを高く評価いただいたことはたいへん光栄です。受賞理由に挙げていただいた「植物生態学的観点から植物群の時間的・空間的分変遷を解明」という私の研究の方向性は、1991年から1992年にかけて客員研究員としてのミネソタ大学での研究においてご指導いただいた Margaret Davis 教授の研究姿勢と、また、大阪市立大学理学部を中心に活動していた植生史研究会に集まった若手（当時）研究者や院生との昼夜を問わない議論に大いに影響されています。これは、時間軸を入れて、まさに四次元的に現在の植生を理解しようとする姿勢です。1990年代後半からは、バイカル

湖から極東ロシアにかけての植生史解明に Sergey Krivonogov 博士はじめ多くのロシアの研究者と共同で取り組んできました。この経験は、現在の日本の植生帯やその成立過程を、日本列島だけではなく、東アジア全体の自然史の中で位置付ける必要があるとの視点を広げてくれました。そこから中国、韓国の花粉学者とともに Quaternary International の特別号の編集を2回にわたり行うことになりました。さらに、花粉学分野で長年の懸案でありました国際花粉学会議を日本へ招致し、2012年に東京で国際古植物会議と共同で開催することができました。この国際会議（IPC/IOPC2012）の成功は、2015年 INQUA 名古屋大会推進に少なからず貢献できたのではないかと自負しております。これらの国際的な取組みによって、これまで海外に知られることが比較的少なかった日本の花粉学の成果の国際的な発信をさらに進めることができましたと思います。また、以上の様な研究活動の中で、多くの若手研究者が育ってきたことは、今後の古生態学研究の発展にとって頼もしく嬉しいことでもあります。私の研究活動において、初期に指導していただいた京都府立大学の故竹岡政治名誉教授、国際的な研究のきっかけを与えていただいた上記 Margaret Davis 教授、さらに様々な共同研究を進め、議論していただいた国内外の多くの研究者の皆さんのご助力なしには、私の学術賞受賞はありえなかったと思っております。さらに、私の研究室で一緒に研究をすすめてきた多くの学生や研究者の皆さんには、研究を推進する上で多大な協力をいただきました。今回の学術賞受賞に際して、研究を支えていただいたこれらの多くの皆さんに心から感謝申し上げます。

◆論文賞・奨励賞受賞者、受賞論文選考報告（論文賞受賞者選考委員会委員長：三田村宗樹）

(1) 選考経過

会員からの推薦は2014年1月31日に締め切られ、論文賞・奨励賞に対して会員からの推薦はなかった。2014年論文賞受賞者選考委員会（三田村宗樹委員長、苅谷愛彦、近藤 恵、里口保文、横山祐典各委員）では、2月以降に委員長を委員互選のうえ決定し、選考日程と進め方の確認を行ったうえで、各賞の候補論文について選考を進めた。選考は日本第四紀学会「論文賞と奨励賞選考に関する内規」に基づき下記の手順で行った。本年度の該当論文は全体で37編であり、うち奨励賞該当は4編である。選考経緯は次のとおりである。各委員に対して各賞候補となる論文の推薦依頼（3/19～4/12）を行った後、委員から推薦された論文（論文賞5編、奨励賞2編）について、委員からの意見の取りまとめと絞り込みを行い（4/21）、委員全員の評価を得られた論文賞候補1編、奨励賞候補1編の推薦を決定した。

委員会では、各賞とも十分なオリジナルデータに基づいて分析・議論された論文を重視し、論文賞については、独創性・総合性・第四紀学及び一般社会への発展性を、奨励賞については独創性と第四紀学での発展性を特に重視して選考を行った。最終候補者・候補論文に対して、6月7日に行われた評議員会において審議され、下記のとおり受賞者・受賞論文が決定された。

(2) 受賞者・受賞論文

●論文賞

受賞者名：田島靖久・林 信太郎・安田 敦・伊藤英之

受賞論文：テフラ層序による霧島火山、新燃岳の噴火活動史。第四紀研究、52巻4号、151-171頁。

受賞理由：霧島火山の新燃岳の噴火活動史について、過去1万年間に3回の噴火のあったことが判明しているほか、火口壁には複数の溶岩が認められていたが一括され、その詳細は明らかでなかった。本論文

では、丹念な地形・地質調査を行い、霧島火山周辺のテフラ層序を整理し、さらに新燃岳から流出した溶岩がつくる地形の追跡と、その全岩化学分析およびテフラ層序・ ^{14}C 年代との関係から詳細な対比を行い、既知のテフラに加えて4.5、2.7、2.3kaのテフラ噴出と、2011年噴火の溶岩に加えて過去5回の溶岩噴出とその時期を明らかにした。テフラ・溶岩の層序関係をふまえて、新燃岳の噴火活動史をまとめ、5.6~4.5ka、2.7~2.3ka、18世紀以降の3つの活動的な時期を見出し、現在が最新の活動時期にあたることを示した。本論文は、現在活動を続ける火山体での野外調査と分析から、テフラ及び噴出溶岩の火山層序を明確にし、その噴火史を再編し、現在の活動評価の位置づけをまとめている。

筆者らの研究は、火山地質学ばかりでなく、自然災害や防災の面でも貢献するところが大きい。また、産学連携のチームで豊富なデータに基づいて導いた結論は評価される。よって日本第四紀学会論文賞に値すると判断する。

＜受賞者の言葉＞ 田島靖久（執筆代表）



この度は、栄誉ある第四紀学会の論文賞に授かり、誠にありがとうございます。

霧島火山の噴火史を明らかにする研究は、災害対策の検討とともに2002年から始めました。噴火履歴、複雑に推移する現象、噴出量のデータは、ハザードマップに必要な情報になります。それらの噴火データの量と質の高さが、マップに重みを与えることになり、そこから噴火の“くせ”を見いだせる可能性があります。新燃岳では、我々が研究する以前は、降下軽石層の噴出年代から5千年に1度、準プリニー式の軽石噴火を行うのが“くせ”ではとも考えられていました。とすれば、享保噴火（1716-17年）に続く2011年のマグマ噴火は新燃岳の中では異常な出来事と帰結されます。しかし、新燃岳の西

～北側の降下軽石層や火山灰層の分布を調べることによって、これまで知られていたより多くの噴火があったことが明らかになり、それらの間に挟まる溶岩との関係も見えてきました。また、 ^{14}C 年代測定結果は、マグマ噴火を起こしたと考えられる降下火砕物層（テフラ）が3つ程の時期にまとまっていたことを示していました。これらの結果から、最近の新燃岳において立て続けに起きたマグマ噴火は、長い山体形成史の中での特別な出来事ではなく、それまで繰り返してきた活動の集中（活動期）が再現しているのであろうとの解釈に至りました。新燃岳での活動期は、数百年のオーダーで起きている可能性があることも驚くべき点です。この高精度の噴火史編年の結果によって、リスク評価の視点から言えば、新燃岳の次のマグマ噴火はさほど遠くない時期におきてもおかしくないことも考えられます。新燃岳の場合、大きな噴火をしたのだから、長い眠りにつくだろうとの考え方は捨てる必要があります。これはこの地域が火山に向きあうための考え方の背景になり得るものです。

この研究の調査中には霧島山周辺の多くの方々には支援をいただきました。2011年噴火時には火山噴火予知連絡会会長の藤井敏嗣先生を始めとし、多くの方に助言を頂きました。また、パレオ・ラボ社の助成によって ^{14}C 年代測定を行うことができ、示唆に富む結論を導くことができました。これらの方々を含めてのチームでの受賞と考えており、関係者には深く感謝します。

●奨励賞

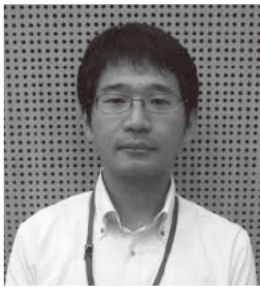
受賞者名：亀井 翼

評価論文：モグラによる遺物の埋没と埋没後擾乱－茨城県稲敷郡美浦村陸平貝塚を対象として－。第四紀研究、52巻1号、1-12頁。

受賞理由：遺跡における遺物の空間配置は、重要なデータである反面、その位置関係が示している意味については、遺物埋積過程は当然ながら、埋積後の風化や擾乱の影響についても検討が必要である。

亀井会員は、動物擾乱のうちモグラによってどのように遺物の移動・再配置が生じるかについて、陸平貝塚を対象として検討した。まず、動物擾乱の先行研究をレビューし、遺物のサイズに依存して、その移動・再配置の状況が異なる点を示した。陸平貝塚の存在する台地上には、アズマモグラによるモグラ塚が点在している。亀井会員は、モグラ塚を構成する土砂に含まれる土器片や礫の最大長を計測し、モグラが運搬できる遺物は5cm未満であることを示した。さらに、陸平貝塚における構成層に含まれる土器片最大長を検討した。その結果、貝塚を覆う最表層のI層は5cm未満でモグラ塚に含まれる分布と類似し、II層の土器片最大長分布はバイモダルで5cm以上の土器片も含まれる点でモグラ塚の分布と異なるが、上位のI層から沈下した大型の土器片が含まれるとし、I・II層は動物擾乱の顕著な層準と評価した。結論として、アズマモグラによって、5cm未満の遺物の一部は、土壌とともに地表下の浅い部分を往復し、5cm以上の遺物は沈下すると結論づけ、遺物の大きさに伴って生じるモグラによる二次的擾乱を明確に示した。

土壌層における動物擾乱について定量的・具体的な資料にもとづき議論していて、考古学のみならず地質学にも参考となる点が多い。よって日本第四紀学会奨励賞に値すると判断する。

<受賞者の言葉> 亀井 翼

この度は栄えある日本第四紀学会奨励賞を賜り、まことにありがとうございます。論文執筆にあたりまして、大学院在籍時の指導教官である山田昌久先生、出穂雅実先生、議論に付き合っていたいただいた首都大学東京考古学研究室ならびに忍路子研究会の皆様、調査にご協力いただいた美浦村教育委員会の皆様にお礼申し上げます。また、論文投稿後に丁寧な対応をしてくださりました匿名査読者様、編集幹事の皆様、編集書記様にお礼申し上げます。

奨励賞をいただいた論文は、モグラによって考古資料がどのように動かされるのかを研究したものです。執筆当時、私が発掘調査に参加していた茨城県美浦村の陸平貝塚には、モグラがトンネルを掘った際の廃土でできたモグラ塚がたくさんありました。その塚のなかに土器

片が含まれているのを見て、北米などで行なわれていた、動物や虫による遺物の埋没後擾乱の研究を日本でもやってみよう、と考えたのが本研究のきっかけでした。遺物が埋没したのち、どう動いたのか、という埋没後擾乱の研究は、遺跡における遺物空間分析を行う前提となります。そのため、海外では動物擾乱に絞ってみても、ミミズや、穴居性のげっ歯類、はてはアルマジロにいたるまで、さまざまな行為者による擾乱が研究されてきました。日本列島においても、固有の気候、景観、動植物相を反映した固有の埋没後擾乱があるはずで、モグラによる擾乱はそのひとつです。

本研究では埋没後の過程に注目しましたが、自然営力による変形作用は、遺跡が地表に残されたその瞬間から、埋没する過程においても働きます。遺跡形成過程の全体像のうち、本研究が明らかにしたのはほんの一部にすぎません。今後はこの受賞を励みに、地道に事例研究を積み重ねていきたいと存じます。考古学、第四紀学の発展に貢献できる成果をあげられるよう、より一層努力してまいりますので、ご指導ご鞭撻のほど、よろしく願いいたします。

◆日本第四紀学会 2014 年学会賞・学術賞受賞者講演会のお知らせ

期日：2015年2月1日(日) 13:25～17:30 (参加費無料、申し込み不要)

会場：東京大学本郷キャンパス理学部2号館講堂

(会場詳細は http://www.u-tokyo.ac.jp/campusmap/cam01_06_02_j.html をご参照ください)

- 13:00～ 受付開始
- 13:25～13:30 開会挨拶
- 13:30～14:15 学会賞受賞講演：小野有五 会員
「第四紀学と環境保全：研究者＝活動者としての25年」
(受賞件名：東アジアにおける氷期・間氷期の気候変化と地形発達の研究と環境保全に関する実践的研究)
- 14:15～15:00 学会賞受賞講演：斎藤文紀 会員
「アジアの国々との共同研究から学んだこと」
(受賞件名：日本列島及びアジアの大陸棚から沿岸平野の地質と後期第四紀の古環境に関する一連の研究)
- 15:00～15:45 学術賞受賞講演：阿部彩子 会員
「第四紀の氷期間氷期サイクルの謎を追って」
(受賞件名：氷期・間氷期サイクルと古気候モデリングに関する一連の研究)
- 15:45～16:00 休憩
- 16:00～16:45 学術賞受賞講演：池原 研 会員
「海底堆積物による地震・津波発生履歴の解明の研究の現状と今後の展望」
(受賞件名：日本周辺海域における最終氷期から現在に至る海洋環境変動と堆積作用に関する一連の研究)
- 16:45～17:30 学術賞受賞講演：高原 光 会員
「北東アジアにおける最終氷期以降の植生史」
(受賞件名：花粉分析に基づく後期更新世以降の東アジア植生史研究への貢献)
- 17:30 閉会

なお、講演会前(10:00～13:00)に評議員会の開催を予定しています。

◆「日本第四紀学会賞」と「日本第四紀学会学術賞」の候補者推薦の募集

2015年の「日本第四紀学会賞」（以下「**学会賞**」）と「日本第四紀学会学術賞」（以下「**学術賞**」）の受賞候補者の受付を開始いたします。両賞は、学会賞受賞者選考委員会が、推薦された候補者の中から受賞候補者を選考し、2015年4月または5月に開催予定の評議員会において受賞者が決定され、2015年総会で表彰される予定です。

「**学会賞**」：第四紀学の発展に貢献した顕著な業績や活動及び学会活動に貢献した正会員に授与。
学会における最高の賞。毎年若干名。

「**学術賞**」：第四紀学に貢献した優れた学術業績をあげた正会員に授与。

優れた編書、著書、論文などの一連の業績が対象。

対象成果が複数の著者（研究グループ等を含む）によりなされた場合は、筆頭著者または代表者に授与。毎年若干名。

つきましては、下記要領ならびに日本第四紀学会ホームページに掲載されている「日本第四紀学会学会賞規定」及び「日本第四紀学会学会賞と学術賞選考に関する内規」をご参照の上、「**学会賞**」及び「**学術賞**」の候補者をご推薦いただきますよう、お願い申し上げます。両賞の募集は今回で8回目を迎えましたが、両賞設立以前から長年にわたりご活躍・ご尽力されてきた方、第四紀学に関連する研究分野を広く世間に広めた方、誰も解決できなかった課題に明快な解答を与えた方、これまでになかった新しい考え方や研究手法を取り入れて成果を出された方など、広くご推薦をいただきたくお願いいたします。ご自分の周囲や専門分野だけでも、この人こそ受賞者にふさわしいという方があれば、ぜひご推薦ください。歴代受賞者につきましては、第四紀学会ホームページの以下のサイトをご覧ください。

<http://quaternary.jp/intro/gakkaisyo.html>

1. 推薦書類：推薦書類には、推薦者名（自薦を含む）、賞の名称、「**学会賞**」の場合には候補者名及び具体的な業績や活動内容を示した受賞件名と推薦理由（600～800字程度）を、「**学術賞**」の場合には候補者名及び受賞の対象となる一連の業績を含めた受賞件名と推薦理由（600～800字程度）を記入してください。
2. 推薦書類の提出先
郵送の場合：
〒169-0072 東京都新宿区大久保2丁目4番地12号 新宿ラムダックスビル10階
日本第四紀学会 学会賞受賞者選考委員会 宛
電子メールの場合：
daiyonki(at)shunkosha.com
電子メールの件名に「日本第四紀学会 学会賞 受賞者選考委員会 宛」と明記の上、推薦文はテキストファイルの添付書類で送付してください。
3. 推薦書類の提出期限 2015年1月31日（土）【必着】

◆「日本第四紀学会論文賞」と「日本第四紀学会奨励賞」候補論文推薦の募集

2015年の「論文賞」と「奨励賞」の推薦を下記のとおり受け付けます。これらの賞は、過去2年間の「第四紀研究」に掲載された論文とその著者が対象になります。会員の皆様から自薦・他薦によって候補論文と候補者をご推薦いただき、論文賞受賞者選考委員会において受賞候補論文・受賞候補者の選考を行います。受賞論文と受賞者は、2015年4月または5月に開催予定の評議員会において決定され、2015年総会で表彰される予定です。

「論文賞」：会員を含む論文著者全員に授与。毎年1～2件程度。

対象は掲載された全ての論文（短報を含む）。

「奨励賞」：会員である筆頭著者に授与。年齢は2015年4月1日時点で35歳以下。毎年1～2件程度。

受賞者には副賞として5万円の奨学金も授与されます。

つきましては、下記要領ならびに日本第四紀学会ホームページに掲載されている「日本第四紀学会学会賞規定」及び「日本第四紀学会論文賞と奨励賞選考に関する内規」をご参照の上、「論文賞」の候補論文と「奨励賞」の候補者をご推薦いただきますよう、会員各位にお願い申し上げます。これまでの受賞者につきましては、第四紀学会ホームページの以下のサイトをご覧ください。

<http://quaternary.jp/intro/ronbun.html>

1. 選考対象：「第四紀研究」第52巻（2013年）及び第53巻（2014年）に掲載された論説、短報、総説、資料、講座及び特集号の論文。「論文賞」の場合には、著者に会員が含まれることが必要。「奨励賞」の場合は、筆頭著者が35歳以下の会員であること。
2. 推薦書類：推薦書類には、推薦者名（自薦を含む）、賞の名称、「論文賞」の場合には全著者名と候補論文名（巻号頁を明記）及び推薦理由（500～800字程度）を、「奨励賞」の場合には候補者名と推薦論文名（巻号頁を明記）及び推薦理由（500～800字程度）を記入してください。
3. 推薦書類の提出先
郵送の場合：
〒169-0072 東京都新宿区大久保2丁目4番地12号 新宿ラムダックスビル10階
日本第四紀学会 論文賞受賞者選考委員会 宛
電子メールの場合：
daiyonki(at)shunkosha.com
電子メールの件名に「日本第四紀学会 論文賞 受賞者選考委員会 宛」と明記の上、推薦文はテキストファイルの添付書類で送付してください。
4. 推薦書類の提出期限 2015年1月31日（土）【必着】

◆ 2014年大会 若手発表賞の報告

2014年大会では、若手発表賞について61件のエントリーがありました。
 今大会は最終日まで一般参加者による発表が行われたため、審査は大会終了後に行われました。
 その結果、次の方々の受賞が決定しました。おめでとうございます。
 また、厳選にご尽力いただいた15名の審査員の皆様には紙面を借りて御礼申し上げます。

以下、受賞者（敬称略）と発表タイトル

- ◎竹下欣宏（信州大）・松島信幸・寺平 宏（伊那谷自然友の会）・内山 高（富士山科学研）・熊井久雄（大阪市大）
 「前期－中期更新世境界層準の指標テフラ層－御岳白尾テフラ－」
- ◎工藤雄一郎（国立歴史民博）
 「縄文時代草創期における土器の利用と古環境」
- ◎佐々木由香（パレオ・ラボ）
 「縄文時代の編組製品の加工技術と素材の地域性」
- ◎那須浩郎（総研大）
 「縄文時代から弥生時代への移行期におけるイネと雑穀の栽培」
- ◎長島佳菜（JAMSTEC）・豊田 新（岡山理科大）・多田隆治（東京大）
 「完新世における偏西風－東アジア夏季モンスーンの千年スケール変動」
- ◎都築賢伍・横山祐典・川久保友太・窪田 薫・関 有沙（東京大）・荒岡大輔・鈴木 淳（産総研）
 「LA-HR-ICPMSによる石垣島津波石サンゴ化石を用いた古気候復元」
- ◎久保田好美（科博）・木元克典（JAMSTEC）・多田隆治（東京大）・内田昌男（環境研）・池原 研（産総研）
 「東シナ海における最終融氷期以降の黒潮の変動」
- ◎関 有沙・横山祐典・宮入陽介・中村淳路（東京大）・鈴木 淳（産総研）・菅 浩伸（九州大）・松崎浩之（東京大）・Tezer Esat・Stephen Eggins（オーストラリア国立大）
 「放射性炭素年代測定法とウラン系列核種年代測定法を用いた日本の石筍の年代測定」
- ◎石輪健樹・横山祐典・宮入陽介・Obrochta Stephen・佐々木猛智（東京大）・鈴木 淳（産総研）・池原 実（高知大）・池原 研（産総研）・木元克典（JAMSTEC）・Julien Bourget（西オーストラリア大）・松崎浩之（東京大）
 「最終氷期最盛期における Bonaparte 湾の相対的海水準変動」
- ◎渡邊隆広・奈良郁子（東北大）・松中哲也（筑波大）・山崎慎一・土屋範芳・箕浦幸治（東北大）・中村俊夫（名古屋大）・掛川 武（東北大）・Nathalie FAGEL（リエージュ大）・Liping ZHU・Junbo WANG（中国科学院）・西村弥垂（東海大）
 「チベット高原プマユムツォ湖堆積物の無機化学組成による過去約12,500年間のモンスーン活動の復元」
- ◎雨川翔太・横山祐典・窪田 薫・関 有沙・宮入陽介（東京大）・坂井三郎（JAMSTEC）・P. Ajithprasad（マハーラージャ・サヤジラーオ大学）・前李英明（法政大）・長田俊樹（地球研）
 「西インド、カッチ湾の化石耳石による中期－後期完新世環境復元」
- ◎窪田 薫・横山祐典（東京大学）・石川剛志（JAMSTEC）・鈴木 淳（産総研）
 「20世紀の北西太平洋の海洋酸性化と小笠原父島で得られたハマサンゴとの関係」

◆日本第四紀学会 2015年大会案内（第一報）

日本第四紀学会 2015年大会は以下の日程で開催の予定です。
詳しくは次号以降の第四紀通信と学会ホームページに順次掲載していきます。

- ・開催期間：2015年8月29日（土）・8月30日（日）の2日間
- ・開催場所：早稲田大学 早稲田キャンパス（東京都新宿区）
- ・日程（案）：
 - 8月29日 一般発表、評議員会
 - 8月30日 一般発表、総会、シンポジウム（開催がINQUA名古屋大会の直後であるため大会期間が例年よりも短くなっています）

◆INQUA名古屋大会の発表申し込み及び参加補助の締め切りは、12月20日です。

口頭発表とポスター発表ともに同日締め切りですのでご注意ください。
大会のホームページからのみの受付となります。
是非この機会を活用して皆さんの成果を発表して頂き、世界の研究者と交流し、INQUA名古屋大会を有意義なものにして楽しんで頂けますようお願い致します。

<http://inqua2015.jp>

また、INQUA大会への参加補助には、以下の2種があります。
これらの申し込み締め切りも12月20日になりますので、是非活用してINQUA大会にご参加下さい。

- 1) ポスドク及び若手研究者支援:大会ホームページのFinancial Assistanceから申し込んで下さい。
登録料と交通費が支給対象になります。（若手:2015年8月1日現在で、博士取得後8年未満）
- 2) 学生・院生:大会の日本語ページに申し込み要領が記載されています。登録料が支給対象になります。

◆2014年度第2回評議員会案内

下記の日時にて、日本第四紀学会2014年度第2回評議員会が開催されます。
評議員の方には、後日通知を差し上げますが、会長経験者並びに名誉会員の方も評議員会に出席し意見を述べる事ができますので、ご検討ください。

日時：2015年2月1日（日）10:00～13:00
場所：東京大学本郷キャンパス理学部二号館第二講義室

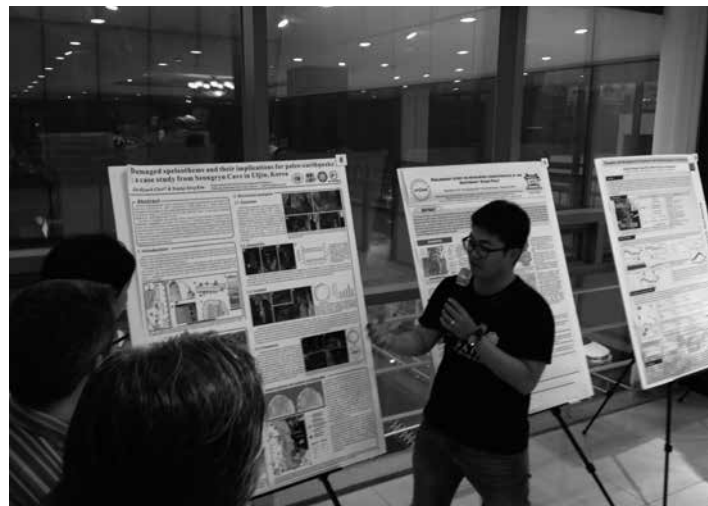
*なお、当日13:30より同じ棟にて学会賞・学術賞受賞者講演会が開催されます。
会場への行き方を含めて、本通信P8の◆学会賞・学術賞受賞者講演会のお知らせを参照ください。

◆ 「5th International Meeting on Paleoseismology, Active Tectonics and Archeoseismology」 参加報告

吾妻 崇（産業技術総合研究所）



口頭発表セッションの様子



ポスター発表セッションの様子

9月21日（日）から9月26日（土）に釜山の釜慶大学（Pukyong National University）で開催された「5th International Meeting on Paleoseismology, Active Tectonics and Archeoseismology」に参加してきました。この会合は、INQUAの研究委員会のTERPROに属するIFG（INQUA Focus Group）の一つである「Paleoseismology and active Tectonics」の活動として行われており、活断層や活構造のほか、地震被害を受けた記録がある歴史的建造物や第四紀地質に関する巡検を毎回行っています。今までに開催されたイスラエル、スペイン、メキシコ（モレリア）、ドイツ（アーヘン）に続き、今回が5回目の開催になります。これまでの会合と同様に、プレ巡検－討論会－ポスト巡検で構成されていましたが、私は都合によりポスト巡検には参加できませんでした。ポスト巡検は韓国の主要な活断層であるヤンサン断層（Yangsang fault）やウルサン断層（Ulsan 断層）を見学するコースでしたが、参加できずに大変残念でした。

さて、今回のシンポジウムには、開催国の韓国ならびに研究グループの中心メンバー（イタリア、ドイツ、イスラエル、米国、日本）のほか、ハンガリー、ロシア、イラン、インドネシア、ベトナム、フィリピン、オーストラリアなどから参加があり、合計約40名の研究者とその家族が集いました。日本からは私を含め、8人（同伴の家族を含む）が参加しました。主催者である釜慶大学のKim教授とその学生・院生のみなさんによる細やかな準備・運営のおかげで、大きな問題もなく会合を開催できたことに感謝します。

韓国はプレート境界から遠く離れているため、活動度が高い活断層の存在は知られていません。それでも、原子力発電所などのような重要施設については、活断層に関する地質調査が義務づけられており、実際に第四系を切る断層がいくつか見つかっています。また日本海に面した東海岸には、数段の段丘地形が発達しています。

9月22日(月)に行われたプレ巡検では、朝鮮半島の東海岸にある Weolsung 発電所の周辺にみられる海成段丘とその堆積物を切る断層を観察しました。また、発電所の近くに建設されている低レベル廃棄物処分施設を見学しました。韓国には火山灰がほとんど降下していないため、段丘面の編年は主に OSL に基づいています。現地では、OSL 年代測定結果に基づいて MIS 5a と MIS 5e に形成されたとされている段丘の分布の様子をみながら、それぞれの地形面の高度変化や年代分析の結果などに関する説明を受けました。そのほかにプレ巡検では、Eupchon 断層上に設置された歪みを測定する機器や地下の体積歪みを計測する調査井を見学し、昼食時には海岸でみられる横方向に延びる柱状節理を観察しました。

討論会は6つのセッションに分かれて進められました。1日目の9月23日(火)には、オープニングセレモニーの後、「地震地質学 (Earthquake Geology)」、「リモートセンシングと地形学 (Remote Sensing & Geomorphology)」、「地震考古学 (Archeoseismology)」に関するセッションが開催されました。

2日目の9月24日(水)には、「Paleoseismology (古地震学)」、「韓国の活構造 (Korean Active Tectonics)」、「重要構造物のための地震危険度評価 (Seismic Hazard Assessment for Critical Facilities)」、「地震の二次的影響 (Secondary Effects of Earthquake)」に関するセッションが開催されました。私も「Paleoseismology」のセッションで発表させて頂きましたが、この分野の著名な研究者である McCalpin 氏や Rockwell 氏と並んでの発表ということで大変緊張しました。

会場は釜慶大学の講演ホールとゲストハウスが含まれた建物で行われ、朝食と昼食も隣接した建物で摂ることができ、会合中の生活は大変快適でした。また、毎日の夕食も、参加者全員でバスで移動し、主催者が手配してくれたレストランへ行ったので、会合中は余計なことは気にせず議論と巡検に集中することができました。

本研究グループの次回会合は、来年4月にイタリア中部のフッチーノで開催されます。活断層や活構造、そして遺跡にみられる過去の地震被害に関する研究に興味がある方はぜひ参加を検討してみてください。

◆ 「6th International Meeting on Paleoseismology, Active Tectonics and Archeoseismology」(イタリア、フッチーノ)開催案内

標記会合が来年4月19日から24日にかけて開催されます。

この会合は、INQUAの委員会TERPROが運営しているIFG (International Focus Group) の一つ“PALACTE : Paleoseismology and active Tectonics”の活動として、開催地を移しながら毎年開催されているものです。

フッチーノはローマの東のアペニン山脈の麓に位置する街で、最近話題になったラクイラ地震の震源域の南側に位置しています。この街では、1915年に発生した地震によって大きな被害を受けており、来年はその地震から100年を迎える年にあたります。

この会合への参加登録等に関する詳細につきましては、TERPROのホームページ (<http://www.terpro.org.ar/meetings.htm>) でご確認下さい。

◆ 22 期第 5 回日本学術会議地球惑星科学委員会 INQUA 分科会議事要旨

平成 26 年 8 月 11 日 (月) 10:00 ~ 12:00
 学術会議 5C 会議室
 出席: 奥村 (委員長)、斎藤 (副委員長)、佐竹、春山、
 佃、海津 (記録)、
 欠席: 渡辺、小口、北里、熊木、鈴木、安成
 オブザーバー: 太田陽子

議題

1. 前回議事録の承認
2. INQUA 執行委員会報告 (奥村晃史)
 - ・第四紀層序年代の課題: Anthropocene 審議・Holocene の細分
 - ・SACCOM と IUGS-ISC-SQS (国際層序学委員会第四紀層序サブコミッション) の連合委員会設置に向け議論。
 - ・抛出金のカテゴリー割り当て変更。
 - ・プロジェクト・フォーカスグループ選考。日本から小野 昭提案の一件を採択。
 - ・時期役員・名誉会員の推薦期限の確認。
 - ・INQUA と Future Earth の関わりを引き続き検討。
 - ・次回の執行委員会はケープタウンで 1 月に開催。
 - ・Shackleton メダル (35 才以下若手) の推薦を考えてほしい。
3. 2015 年 INQUA 名古屋大会の準備状況 (斎藤文紀)
 Quaternary International の特集号を準備中である。
 登録等のシステムと巡検関係を JTB 関連の 2 社に依頼している。
 セッションについては、132 件の提案があり、そのうち 1 件がリジェクト、109 件は提案そのまま、21 件は統合されることとなった。
 アブストラクト締切は 12 月 20 日である。
4. 22 期活動の総括
 INQUA 日本開催に精力を注いで活動した。学術会議への報告を事後承認した。
5. 23 期への申し送り
 日本で第四紀学を推進することの意義 (Island Arc、変動帯、人口集中地域、防災等) を強調する必要がある (佃委員)。
 地球惑星科学各分野との連携を検討することも必要 (佐竹委員)。
 若い良い研究者をどのように育てるかを考える必要あり (佃委員)
 東南アジアなどに対するリーダーシップをとるように努力することが望まれる。(春山委員)
 ASQUA への協力。次回は韓国。(斎藤副委員長)

22 期日本学術会議地球惑星科学委員会
 INQUA 分科会活動報告

INQUA (国際第四紀学連合) 分科会は日 ICSU のユニオンの一つである INQUA に対応して日本国内での第四紀研究の推進と成果の普及、国際的な発信と研究の振興を目的とし活動している。本期間の活動の中心は平成 27 年 7 月に名古屋で開催される第 19 回 INQUA 大会の準備を同大会組織委員会および日本第四紀学会と協同で進めることにあった。INQUA 分科会では、5 回開催された分科会を通じて名古屋大会の準備について議論をつくすとともに、分科会の主要メンバー全員が名古屋大会の組織委員として具体的な大会準備に携わった。その準備状況は INQUA 執行委員会から高く評価されている。その一方で、INQUA における日本のプレゼンスを高めるための活動も継続し、日本から提案された INQUA プロジェクト 3 件が実施されるとともに、副会長 (奥村晃史) のほかに研究委員会役員複数人が活発に活動を続けている。この高いレベルの活動が 2015 年大会を契機として日本国内での第四紀学の振興と普及、日本の第四紀研究の世界への発信と将来の国際交流の推進に大きく貢献することが期待される。

23 期日本学術会議地球惑星科学委員会
 INQUA 分科会発足

10 月 1 日に 23 期日本学術会議が発足し、新しい会員・連携会員が選出された。これに伴い、23 期 INQUA 分科会も以下のメンバーで発足することが予定されている。

- 木村 学 (東京大学大学院理学系研究科: 第三部会員)
- 海津 正倫 (奈良大学文学部)
- 小口 高 (東京大学空間情報科学研究センター・教授)
- 奥村 晃史 (広島大学大学院文学研究科: 委員長)
- 北里 洋 (独立行政法人海洋研究開発機構海洋・極限環境生物圏領域)
- 小嶋 智 (岐阜大学工学部)
- 斎藤 文紀 (独立行政法人産業技術総合研究所地質情報研究部門: 副委員長)
- 佐竹 健治 (東京大学地震研究所)
- 佃 榮吉 (独立行政法人産業技術総合研究所)
- 原田 尚美 (独立行政法人海洋研究開発機構研究開発センター: 幹事)
- 春山 成子 (三重大学大学院生物資源学研究科)

◆日本第四紀学会 2014 年度第 3 回幹事会議事録

日時：10月26日 10:00～16:00

場所：広島大学東京オフィス

出席：小野、奥村、齋藤文紀、吾妻、出穂、岡崎、北村、小森、齋藤めぐみ、佐藤、米田、水野、中野

欠席：卜部、藤原、宮内幹事長

1. 松葉千年会員より、「The Miracle Topography of Suzuka」と「第四紀の新定義と東海層群模式露頭」の資料の送付があった(20140905)。
2. 木越邦彦名誉会員を偲ぶ会に第四紀学会から供花代として35,640円を支払った。偲ぶ会の報告を世話人の福岡孝昭会員またはその他の参加者から、次号第四紀通信への報告記事または追悼文の執筆を依頼した。

庶務 (北村)

1. 北淡国際活断層シンポジウム2015の後援依頼があり(20141006)、これを承諾した(20141006)。
2. 第19回震災対策技術展の後援依頼があり(20141006)、これを承諾した(20141006)。

庶務 (佐藤)

1. 北田奈緒子氏(地域地盤環境研究所)から壇原徹他(2010)琵琶湖1400m掘削試料の編年:フィッシュトラック年代とテフラ同定の再検討、第四紀研究、49-2の図2および竹村恵二他(2010)琵琶湖における過去5万年間の火山灰と堆積物、第四紀研究、49-3の図1・3・4・5の転載許可願(転載先:「地域の地質」『新関西地盤—近江盆地—』関西圏地盤研究会)があり(140901)、これを許可した(140919)。
2. 紀藤典夫氏(北海道教育大学函館校)から貝塚爽平(1987)将来予測と第四紀研究、『百年・千年・万年後の日本の自然と人類』(第四紀学会編、古今書院)の図2の転載許可願(転載先:『サロベツ湿原と稚咲内砂丘林帯湖沼群』北海道大学出版会)があり(140929)、古今書院にも転載許可申請を行うことを条件として許可した(141009)。

編集 (北村代理)

1. 2014年度第1回編集委員会を9月27日に開催した。
 - ・今後の掲載号の構成は以下の通り。
 - 53巻6号 受賞記念論文1編、論説1編、短報1編、講座1編、書評1編の初校を準備中。
 - 54巻1号 論説1編、短報2編が掲載決定。
 - 次回編集委員会(11月22日)での受理論文も加える予定。
 - ・手持ち論文は論説9編、短報1編、講座1編。
 - ・2014年柏大会で開催された以下の2つのシンポジウムから特集号の希望があった。
 - シンポⅡ「更新世・完新世の資源環境と人類：小野 昭ほか」

- シンポⅣ「東アジア～北西太平洋における第四紀の気候と環境変動：公文富士夫ほか」
2. 編集状況リストを作成することとした。

行事企画 (出穂・小森・米田)

1. 2014年大会の若手発表賞の受賞者リストを会員メーリングと学会HPに掲載し、次号の第四紀通信に掲載する。表彰状に関わる費用として39,938円を支出した。
2. 今後の同賞の通知は、受賞者への通知、会員メールでの受賞者の報告、HPへの掲載を可能な限り同時に行うこととした。
3. 2014年大会事務局に会計報告を依頼し、LOCの引継ぎ物品を学会事務局に返却するよう連絡する。
4. 2015年早稲田大会の開催場所・期日を次号の第四紀通信に掲載する。
5. 評議員会および受賞者記念講演会を2015年2月1日に東京大学本郷キャンパス理学部二号館・第二講義室で以下の通りに開催予定。
 - 評議員会 10:00～13:00
 - 受賞者記念講演会 13:30～17:00
 - 経費：講堂借料 10,000円
 - 受付・会場アルバイト 32,000円
6. 第四紀学会にジオパークに関わる特別委員会を設置することとし、原案・委員(会員に限定)を目代邦康会員に11月末までに提案を提出いただき、幹事会で検討の後、次回の評議員会に同委員会の設置を諮ることとした。
7. 行事・企画委員会の委員の人選を幹事が行うこととした。
8. 2016年大会(60周年記念)の開催場所について意見交換した。

広報 (齋藤)

1. HP更新の作業は奥村公弥子さんに依頼し、作業は毎週月曜日(祝日を含む)の17～19時に行うこととなった。
2. 第四紀通信 vol.21, no.6(12月号)掲載記事と担当者を確認した。

会計 (岡崎)

1. HP更新の担当者2名のうちの1名の作業業務の時給を承認した。
2. HP更新の担当者1名の後任を検討することとした。

渉外 (吾妻)

1. 日本地球惑星科学連合2015年大会に「ヒト—環境系の時系列ダイナミクス」、「活断層と古地震」、「人間環境と災害リスク」、「ジオパーク」、「津波堆積物」、「流域の水及び物質の輸送と循環—源流域から沿岸域まで—」のセッションを提案した。

日本学術会議（奥村）

1. 第23期の日本学術会議の委員と連携会員が報告され、地球惑星科学委員会 INQUA 分科会の構成委員は、委員長 奥村晃史、副委員長 斎藤文紀、海津正倫、小口 高、北里 洋、木村 学、小嶋 智、佐竹健治、佐藤宏之、佃 榮吉、原田尚美、春山成子（敬称略）。

JpGU 学協会長会議（斎藤）

1. 10月16日に開催された第9回学協会長会議の報告があり、学協会長会議からユニオンセッション開催の提案があった。
2. 2016年のJpGUの開催場所については検討中。
3. AGU Fall Meetingにおける「Geoscience Japan」への出展とJpGU参加学協会との協力が報告された。
4. 公益認定等委員会事務局からの提言を受け、次年度よりJpGUフェローの推薦条件からJpGU会員であることを外すこととした。

法務委員会（斎藤）

1. 法務委員会から報告があった。

国際第四紀学連合第19回大会（斎藤）

1. 10月上旬から、国際第四紀学連合第19回大会の投稿を開始したので、積極的に投稿いただきたい。
2. 日本在住のポストドクには、登録料・旅費に補助金が出される。

JpGU 環境・災害対応委員会委員（北村）

1. 田力会員の任期を次回のJpGU理事会（12月）までとし、卜部会員の任期の始まりを次回のJpGU理事会（12月）とすることを確認した。
2. JpGU環境・災害対応委員会からのアンケートへの回答し、次年度のユニオンセッション「連合は環境・災害にどう向き合っていくのか？」の開催を賛成、話題提供可能、総合討論で議論に参加できるかどうかは未定とした。

事務局

逝去2名（柿崎良夫会員、首藤次男会員）があった。

審議

1. 会員の入退会を検討し、2名の入会（山口恵美君、小澤清男君）と2名の退会（小暮岳実会員、河名俊男会員）を承認した。
2. 学会賞・論文賞選考委員候補者については、11月末までに小野会長を中心に調整し、12月中旬には評議員に選挙用紙を発送することにした。なお、選考委員候補者と選挙管理委員会委員と組織改革委員会委員は原則として重複しないこととした。
3. 第四紀学と第四紀学会広報パンフの0次案について検討し、パンフを次回のJpGUまでに作成することとし、北村が原案を検討することとした。また、JpGUに学協会展示ブースを出展することとし、出展内容の詳細は渉外・企画幹事が検討することとした。
4. 「組織改革委員会」の人選について意見交換し、会長、副会長、幹事長、北村幹事のほか数名で構成することとした。
5. 通信評議員会の導入について検討し、第14条に第5項「会長が必要と認める場合には、通信をもって評議員会を開催し、3分の1以上の返信をもって成立させることができる」を追加することとし、文言の最終確認を次回の幹事会でを行い、次回の評議員会に諮ることとした。
6. デジタルブック最新第四紀学のちらし1000部の支出を承認した。
7. 「沖縄県の辺野古・大浦湾における海域埋め立て計画についての要望書提出について（依頼）」について審議し、提出しないこととした。
8. 11月28日に開催するJAQA国際シンポジウムについて検討し、日時、会場、趣旨を会員メールに速やかに配信することとした。
9. 会員からの資料提供について検討し、幹事会で保管の有無を決定し、保管する資料は産業技術総合研究所へ送り、資料リストは第四紀通信に掲載する。
10. 若手・学生発表賞について意見交換し、受賞者数を目安として20%とする。また、審査票の項目を、審査基準を4か5段階にする。

第4回幹事会

日時 12月27日 10:00～
場所 広島大学東京オフィス

お詫び

第四紀通信 第53巻第5号 20ページに掲載された幹事会議事録に誤りがありましたので、以下の通り、訂正いたします。

誤 日本第四紀学会 2013年度第6回幹事会議事録

正 日本第四紀学会 2013年度第7回幹事会議事録

日本第四紀学会 2013年度第6回幹事会議事録が掲載されていないことが判明しましたので、本号に掲載いたします。 庶務・北村

◆日本第四紀学会 2013年度第6回幹事会議事録

日時：2014年7月19日（土）10:00～15:20

場所：明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント7階 C4 会議室

出席：小野会長、吾妻、卜部、奥村、北村、小森、齋藤文紀、齋藤めぐみ、水野、宮内

欠席：藤原、岡崎、出穂、佐藤、米田

審議事項

1. 評議員会・総会における欠席者の委任等に関する内規案を検討し、欠席者は委任状をもって出席に代えることができるが、議決権は行使できないこととした。これに従い、内規を修正することとした。

2. 2014年大会（柏）の日程を確認し、講演要旨集を350部としてLOCを確認することとした。

3. 2014年大会（柏）の一般研究発表の座長の候補者を以下の通り選出した（敬称略）。

9月7日 AM1 中里裕臣、AM2 鈴木毅彦、PM1 田村糸子

9月8日 AM1 佐藤智之、AM2 岡崎浩子、PM1 中条武司

4. 2014年大会（柏）における若手発表賞の運用について検討し、幹事会としては、賞の決定は大会終了後に行うこととし、審査員の候補者を以下の通り選出した（敬称略）。

シンポジウムⅠ 岡田 誠、風岡 修

シンポジウムⅡ 辻 誠一郎、羽生淳子

シンポジウムⅢ 吾妻 崇、北村晃寿

シンポジウムⅣ 齋藤文紀、百原 新

シンポジウムⅤ 高田将志、堀 和明

一般講演 9月7日 中里裕臣、紀藤典夫

一般講演 9月8日 岡崎浩子、中条武司、北村晃寿

5. 2015年大会を、早稲田大学において以下の日程で開催することを会場に伝えることとした。

8月29日 一般講演（口頭・ポスター）総会懇親会

8月30日 午前 一般講演（口頭・ポスター）
午後 シンポジウム（特集号に掲載できる内容が望ましい）

8月29日 評議員会

6. 2013年度会計中間報告と2014年度予算案を検討し、2014年度予算案の支出の雑費に第四紀研究書記パソコン代を計上し、IGU寄付金相応分の100万円を含めて150万円を予備費積立金繰り入れ支出とすることにした。また来年度予算案はINQUA第19回大会準備費として300万円を支出、この資金として予備費積立金を取り崩すこ

ととした。

7. 2015年 JpGU 大会プログラム委員を宮内崇裕会員と吾妻 崇会員を選出することとした。

8. 2015年 JpGU セッションについて、継続的に審議することとした。

9. 学会出版物の販売価格の見直しを検討し、過去の講演要旨集は無料とすることとした。

10. 日本地球惑星科学連合から推薦依頼のあった環境災害対応委員に、卜部厚志会員を選出した。

11. 逝去会員への対応を検討し、以下の通りとした。

・会長経験者・名誉会員の場合には学会名で弔電・生花を送ることとした。生花の予算は2万円程度。会長経験者の場合は告別式で会長が弔辞を述べ、会長旅費・香典代は会長と庶務が相談の上、会計に請求する。弔電・生花の手配は事務局が行い、幹事長・庶務に報告する。事務局が対応できない場合（例えば、休日）は、庶務が代行しても良い。

・会長経験者・名誉会員以外の会員には弔電・生花は送らないこととした。

・会員メーリングリストに掲載する逝去通知の定型文を用意することとした。

12. 学会メーリングリストの送信権限は庶務と広報幹事に限定することを確認した。

13. 学会メーリングリストの不達者への知らせを第四紀通信21巻4号に掲載することとした。

14. 第四紀学会の広報パンフレットを広報委員会が中心になって作成することとした。

報告

行事企画（出穂、米田、小森）

1. 学会賞（海津正倫会員）・学術賞受賞者（中川毅会員、久保純子会員）の講演会を名古屋大学大学院環境学研究科環境総合館で6月7日14～17時に開催した。堀 和明会員には会場手配等で協力頂いた。参加者は120名。

2. 日本第四紀学会共催の第二回放射性炭素年代測定室ワークショップが東京大学総合研究博物館で、5月21～23日に開催された。

3. 2014年大会（柏）で、INQUA2015LOC主催のランチタイムセミナーが開催されることとなった。

次回幹事会

8月16日 10:00～

東京工業大学キャンパス・イノベーションセンター内
広島大学東京オフィス 408号室

◆木越邦彦先生を偲んで



近影：木越邦彦先生

本会元会長で名誉会員の木越邦彦先生は、去る7月6日に94歳で大往生を遂げられました。

先生は旧制学習院高等科を卒業、東京帝国大学理学部化学科に進まれ、卒業されました。戦時下の理化学研究所仁科研究室に入られ、ウラン濃縮の研究を行われました。戦後は気象研究所を経て、1950年から学習院大学理学部で教育・研究に従事され、1990年に定年退職されました。学習院大学に赴任されてからは、屋久杉（縄文杉）の年輪を用いて ^{14}C 年代測定法を確立されたほか、火山岩のイオニウム年代測定法、 α -recoil年代測定法を開発されました。晩年は重力下での気体の熱非平衡の研究に励まれました。定年後は福島県白河市の加速器分析研究所で研究を続けられました。その成果は4年前にドイツの論文誌に掲載されました。先生は2万600件を超える ^{14}C 年代測定を行われ、国内外の地質学、考古学等の分野の研究に貢献されました。本会会員の多くの方がお世話になったことと思われまます。

学習院大学在職中には300人近い学生の卒業研究等の指導をされました。学生に与えた研究テーマは多岐にわたり、先生が広い分野に興味を持たれていたこととなります。お蔭で、私も多方面のことに興味を持つ習慣ができ、自分が学生を指導する時に大変役に立ちました。週1回のゼミでのNature誌、Science誌を中心にした論文紹介は、その論文の持つ意義をしっかりと説明するように厳しく指導されました。卒業研究、ゼミで、サイ

エンスとはどういうものであるかを厳しく叩き込まれました。

先生は大の車好きで、90歳近くまで運転をされていました。またコンパではおどけた行動をされ、学生と一緒に楽しられました。ところで、先生の机の上は書類の山で、すき間が無い状態でした。 ^{14}C 年代測定を依頼に来られた方も戸惑われたようです。このような机の上の状態も私に伝わってしまったようです。

さて、去る9月27日に「木越先生を偲ぶ会」が、ご親族、卒業生をはじめ、本学会関係者を含め210名を超える方々が参加され、盛大に行われました。前半は学習院大学で記念講演が行われ、後半はホテル椿山荘東京に会場を移して「偲ぶ会」が行われました。会場のご遺影の脇には本会と他学会とから供えられた秋の野の花が良い雰囲気を作っていました。先生の甥に当たる木越洋氏（元NHK交響楽団首席チェロ奏者）のバッハの曲の演奏で荘厳な雰囲気で始まりしました。約2時間の間、先生を偲んでの会話で盛り上がっていました。会の進行中はスクリーンに先生の幼少時から晩年までの写真がスライドショーとして映写されました。

七夕（7月7日）にお生まれになった先生は七夕の前日の6日に亡くなられました。翌日の七夕の天に向かって昇って行かれたのだと思います。どの星になられたのでしょうか。今後は天から我々を見守って頂ければと念じ、ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。

元立正大学 福岡孝昭（木越研究室出身）

★★★ 第四紀通信に情報をお寄せ下さい ★★★

第四紀通信の原稿は随時受け付けております。

広報幹事：齋藤めぐみ (memekato(at)kahaku.go.jp) 宛にメールでお送り下さい。

第四紀通信は奇数月月上旬原稿締め切り、偶数月 1 日刊行予定としていますが、情報の速報性ということから、版下が完成した段階でホームページに掲載するよう努力しています。奇数月 15 日頃にはホームページにアップするようにしていますのでご利用下さい。

日本第四紀学会広報委員会 国立科学博物館 地学研究部 齋藤めぐみ
〒 305-0005 茨城県つくば市天久保 4-1-1 FAX : 029-853-8998

広報委員：那須浩郎・糸田千鶴 編集書記：岩本容子

日本第四紀学会ホームページ <http://quaternary.jp/> から第四紀通信バックナンバーの PDF ファイルを閲覧できます。

日本第四紀学会事務局

〒 169-0072 東京都新宿区大久保 2 丁目 4 番地 12 号 新宿ラムダックスビル 10 階
株式会社春恒社 学会事業部内

E-mail : daiyonki(at)shunkosha.com 電話 : 03-5291-6231 FAX : 03-5291-2176